

## 0. 平成 19 年度「西欧中世比較史料論研究」研究活動について

本書は、平成 17 年度より 3 カ年の予定で、科学研究費の助成を受けて活動してきた共同研究について、最終年度の研究成果報告書としてまとめたものである。

本共同研究の趣旨と活動目標については、17 年度に刊行した『西欧中世比較史料論研究平成 17 年度研究成果年次報告書』（2006 年 3 月刊行）に詳しい。ここでは、簡単に触れるにとどめたい。

本研究は、伝統的に史料学研究の中心領域であった西欧中世史を主たる対象として、近年の史料論研究の動向を整理・分析し、さらに歴史学界全体を視野に入れた問題提起を行うことを目標とする。この際、他の時代、とりわけ近世史や、日本・東洋史等を専攻する研究者との交流により、比較史的観点による諸問題の検討を深める。

具体的な活動目標としては、以下のものがある。

第一に、研究会活動を定期的に展開する。この際、専攻する時代や地域を異にする研究者を交えたシンポジウム、西欧中世史に対象を絞った個別研究報告会、欧米の研究者を招聘しての研究会の三種を、バランスを配慮しながら開催する。

第二に、研究動向の検討について、文献目録の作成と個別文献の内容の検討をすすめる。

第三に、研究会活動については、毎年年次報告書を作成して、その内容を公表する。研究動向の検討については、助成の最終年度に報告書を作成する。

最終年度にあたる平成 19 年度は、関係文献の調査・収集につとめるとともに、3 回にわたる研究会活動を実施した。研究会の詳細は、下記の研究会履歴のとおりだが、それぞれは、以下のように位置づけられる。

### 1) 西欧中世史に対象を絞った研究会

第 37 回。研究会（ブルゴーニュ研究会との共同事業）

第 38 回。研究会（西欧中世史研究報告会）

### 2) 研究動向の検討についての研究会

第 36 回。研究会「史料論研究についての学界動向」

このうち、第 36 回研究会の諸報告は、動向論文作成の準備として、本報告書所収の諸論文にその内容が取り込まれているが、他の研究会については、最終年度報告書の趣旨に照らして、内容の掲載を断念した。いずれも、論文等しかるべきかたちで別個公表されることであろう。

本報告書は、3カ年にわたる研究動向整理を受けて準備され、以下のように構成される。

- 1) 西欧中世史料論についての学界動向論文
- 2) 西欧中世史料学、史料研究に関する基本的文献・情報紹介

さらに、昨年度に開催されたロラン・モレル教授研究会における報告原稿は、内容の重要性と公表の可能性を考慮して、本報告書に併載した。なお、モレル教授は、昨年3月の日本滞在中、二種類の報告を準備されたが、そのうち一つは、吉武憲司教授（慶応義塾大学文学部）のご厚意により、『史学』（三田史学会）誌上に掲載された（ロラン・モレル「文書オリジナルとはなにか ―7-12世紀の文書史料に関するいくつかの指摘」、『史学』第76巻 第2・3号、2007年12月、89-120頁）。

助成研究活動の終わりにあたり、共同事業にさまざまなかたちでご参加、ご協力いただいた方々に対して、研究代表者として、あらためて厚く御礼申し上げます。

（岡崎 敦）

## 研究会活動履歴

### 第37回

2007年9月23日（日）、24日（月）

九州大学文学部西洋史学研究室

共通テーマ「史料論についての学界動向」

丹下 栄「中世初期研究における史料論的『まなざし』 ―最近の研究業績から―」

城戸照子「ランゴバルド王国期イタリアのリテラシー」

井手義和「<Codex Wintoniensis>をめぐる研究史」

岡崎 敦「フランス学界における中世盛期文書史料研究」

### 第38回

2007年9月23日（日）

九州大学経済学部棟5階510B演習室

「ブルゴーニュ研究会」との合同研究会

中堀博司「サラン財務官会計簿の史料論的考察 ―支出項目を中心に―」

藤井美男「13世紀ブリュッセルの宣誓人 jurés について」

## 第 39 回

2007 年 12 月 2 日 (日)

九大文学部西洋史学研究室

「西欧中世史研究報告会」

向原宜臣 「封建期フランスにおける修道院の聖人伝戦略

—紛争解決と懲罰の奇蹟—」

大浜聖香子 「12-13世紀におけるポンテュー伯領の統治構造

—ポンテュー伯文書集を用いて—」

岡崎 敦 「12 世紀パリ司教座教会のカルチュレール —Liber niger をめぐって—」